

不登校生徒の校内別室での学習支援について

不登校生徒の状況

対象生徒は、小学校 5 年生後半から不登校傾向となった。中学校入学後、徐々に遅刻と欠席が目立つようになり、腹痛を訴えるようになった。2 学期末から校内の別室に通い始めたことが転機となり、毎週 1 回、登校するようになった。2 年生 2 学期末は別室で定期テストを受験した。3 年生になり、可能なときは教室で授業に参加している。

具体的な取組

○別室対応による不登校生徒の支援

令和 3 年度から、週 5 日間、毎日 3 コマ程度の学習支援教室を開いている。

現在 4 人の生徒が教室復帰を目指し、学習している。



○デジタル機器を活用した支援

学習者用端末を利用し、不登校生徒とメッセージ・連絡のやり取りや、資料等の配付を行っている。

各学年 1 クラス、配信専用端末を配置し、生徒が授業を視聴できるようにしている。視聴後はクラウドに視聴内容等を提出して、参加状況を確認している。

○校内体制の強化

管理職・コーディネーター・SC・SSW・生活指導主任・養護主任・各学年の職員で週 1 回集まり、生徒情報を共有、支援の内容や必要性、方向性等について分析し、話し合っている。SCは空き時間は積極的に校内を巡回している。情報共有も全校体制で密に行っている。

○魅力ある学校・学年・学級づくり

支援のニーズやいじめ被害・不登校等のリスクを抱える生徒の把握・未然防止のために、学校生活満足度調査と生活アンケートを年 2 回実施している。また、生徒主体で実施している行事の事後アンケートも絆づくりの達成率・満足感・所属感の調査に活用している。

成果

別室で支援を受けている生徒は、体調不良の日を除いて継続的に登校できている。自信を得て集団に関われるようになった生徒、教室復帰を果たした生徒、復帰後も心の拠り所として通っている生徒がいる。生活リズム・家庭学習の習慣も身に付いてきている。

課題

加配措置が終了すること、情緒固定級ができることで別室対応できる教員数が限られる。積み上げてきたことを継続できるようにする。

不登校・不登校傾向にある生徒が安心して登校できる環境づくりに ついて

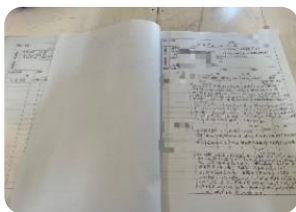
不登校生徒の状況

対象生徒は、中学 2 年生の途中から在籍学級に入れなくなり、集団生活や授業を継続的に受けることに困難さを感じている生徒である。また、起立性調節障害の診断を受け、一日の生活リズムの乱れや他者との円滑なコミュニケーションがとれないことに悩みを感じている。

具体的な取組

○担任とつながる日々の生活記録

当該生徒が、別室登校をしたときの様子などを日誌に書いて担任と共有している。詳細な記録により、生徒の小さな変化にも気付き、担任や校内別室指導支援員が声をかけるなど素早い対応ができた。



○校内支援会議での情報共有

定期的に行われる校内支援会議で、不登校や不登校傾向にある生徒の情報共有をすることで、管理職を含めた学校全体での共通理解を図ることができた。また、その会議に S C や S S W が参加して、専門的な見立てや福祉的な視点から、今後の対応策や支援の方法について検討することができた。

○校内別室指導による柔軟性ある対応

校内別室指導支援員と不登校対応加配教員が中心となって、別室指導の運営を行い、生徒の実態に合わせて登校時間や支援内容の工夫をすることができた。校内別室の環境を整え、登校した生徒が安心して安全に活動できる場所となった。

○不登校対応加配教員との連携

不登校対応加配教員が、生活指導部として他学年の教員や生活指導主任と連携し、不登校傾向にある生徒の早期発見と対応を行うことができた。また、校外での研修内容を校務支援システムなどで共有し、当該生徒に対してのアプローチの方法や支援の具体例を明示した。

成果

校内別室の活用と具体的な生徒情報の共有によって、生徒の新たな居場所の確保を行うことができた。また、特定の学習や行事などでは、在籍学級の集団に入って、活動に参加することができた。

課題

最終的には、通常の学級で授業を受けたいという思いがあるため、校内別室指導支援員と密な連携を図り、在籍学級への登校に向けた支援を行う。